

# 宇宙と暮らしのなかの火を求めて

樺山 紘一

Written by Koichi Kabayama

## 停電世代の昔話

「停電世代」ということはある。戦後の一時期、たしかにぶつうの家庭では、ひんぱんに停電があった。居間にひとつしかない裸電球なのに、予告もなく急に光が減退し、ぶつりと切れてしまう。電力が不足しているぞという、はつきりとした印であった。その心細さというたら、この記憶を共有するものを「停電世代」という。

だが、その世代は、また豊かな経験を共有する。というのも、停電がおこつてのち、すぐにべつうの光景が実現するから。どうとう動揺もなく、家庭をつかさどる母親は、悠然とロウソクをとりだす。さして慌てるわけもなく、ちゃぶ台のうえには、もうロウソクがすえられ、ほのかな灯りがともっている。いつものことだ。こどもたちは、なにこともなかつたように、食後のお茶をすすりつつける。停電世代にとって、それはなんとも形容

しづらいもなく懐かしい風景である。

一本のロウソク。たいそう心もとない光だった。うっかり風をおくると、吹きけしてしまいかねないような灯火。両親の顔が、ほのかに映しだされる。うしろのふすまには、何倍もの影が投影され、それがふしぎな明暗を演出する。どこにも、戦後の貧しさといった惨めな印象をのこしはしなかった。

たぶん、あまり良質のロウソクではなかつたのだろう。煤がまきあがり、ときには蠟の悪臭が鼻をさすこともある。それでも、家庭の団樂がさまたげられず、こどもたちはそろそろ就寝の時間となつてゆく。たつた一本のロウソクのまわりで、家庭の営みが回転する。ふとんにはいる前に、手洗いに立つときなど、いま一本を調達して、注意ぶかくはこんでゆく。うっかりすると、溶けおちる蠟の熱さに、火傷しかねない。

「停電世代」が、はるかな昔を懐かしんでいるところだ。その勝手気儘を、もうすこしお許しいただきたい。もう、停電もなくなつたころ十年以上ものちのこと、

こんどわたしたちは、よく似た光景を、レジャーの場で経験した。そのころ、日本の青年たちのあいだで、登山やハイキングが流行した。いまとなつては、中高年登山として復活した、あの青春イベントである。わたしたちは、競つて山登りにでかけた。ほんのちいさな登山であっても、青年たちはなけなしのリュックを装備して、そこそこの山岳におもむき、夜はといえば、粗末な山小屋に投宿した。むろん、電気などありうるはずもなく、梁からぶらさがつたランプの灯火のもとで、ひそやかな会話をまじえたことだつた。

もう、あらかたの家庭には蛍光灯がいきわたつていたものだから、よけいにランプの灯火がかもしたず、独特の風情に酔いを感じとつたのだろうか。ランプだから、そう容易には消えるわけではないが、それでもはかなげな光に照らされて、青年たちの顔は充実感にあふれていた。もしかすると、ひそかな想いをよせる彼女、もしくは彼氏の姿が、よけいに美しくみえたのかもしれない。こども時代のロウソクが、いまひとたび甦つたように思えた。肩をよせあつて暮らした、あの光景が山小屋の空間に再現している。ランプが暗いだけに、いつそつ同宿の仲間たちとの連帯感が、増幅されたのである。

いまどきになつて、こんな昔話をするとは、われながら気恥ずかしい。もう、わが家にはロウソクはなく、防災用の器具は、大型の懐中電灯となつてしまつた。まして、山小屋にはとうに発電機がすえられて、快適な光空間が実現しているのだから。ほんの懐古談を吐露しているのだとして、寛恕をおねがいするにしたい。



## ロウソクと ランプの歴史

とはいえ、ロウソクとランプとは、人間の歴史にとつて、かなり重要な道標だということ、あらためて強調しておきたい。というのも、夜間の灯火が発案されて以来、そのほとんどの人類史にあつては、このふたつが主導的な位置をしめてきたからである。ガス灯や電灯が発明されてから、まだほんの二〇〇年ほどしか経過していない。停電世代や山小屋世代の経験は、じつはごく普遍的な性格のものだ。みな、おなじような夜間の光景を体験しながら育つてきた。聖徳太子もシーザーも、孔子もソクラテスもおなじく。みな、ごく不安定な灯火のもとで、戦略や思索にいそしんできたのだ。

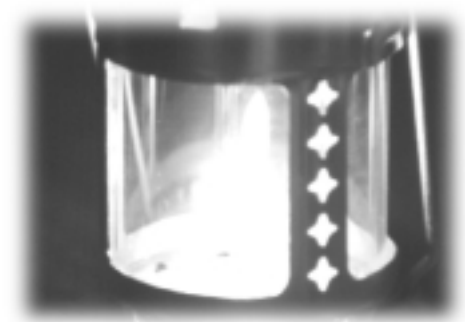
ロウソクは、すでに古代ギリシアにあつて、実用に供されたといわれる。芯に可燃性の植物繊維をあて、これをパラフィンや蠟によつて巻きとつた器具。蠟芯は、すこしずつ燃えながら、ほのかな光線を発する。獣脂や松脂がもちいられたというが、やがてもつと有用な包被体として、蜜蝋が導入された。蜂蜜を精製してつくる蜜蝋が蠟芯をつつむ。芯は、蠟身を吸収して、ゆるやかに燃焼してゆく。そのあいだに、蠟は気化して炎となり、適正な光源をしつらえる。これが、ロウソクである。

ローマ時代の末期に実用化された蜜蝋のロウソクは、やがて中世ヨーロッパで重用される。キリスト教会の祭壇で、特別な効用を発揮したのである。長時間にわた

つて灯火を維持できること。それは、「神は光であった」という形而上学を体現して、あたかも神の恩寵を反映しているかのようだ。しかも、その原材料としての蜜蝋はいえは、蜜蝋という自然界にあって、ただひとつ人間界にならう社会性を実現する昆虫がうみだす精妙な物質である。ここでは、ロウソクはたんなる照明器具をこえて、神の僕ともなつたのである。

いまなお、キリスト教会の祭壇にあっては、常夜灯として、ロウソクが燃えている。信徒たちは、ほんの100円ほどの硬貨を寄進箱に投入したあと、そなえつけのロウソクをとりあげ、着火してそなえる。ロウソクが燃えつきるまでの数時間、神への献身が光とともに連続する。気化によって燃焼をうながす蠟芯は、信徒の献身を預かりつつける。ロウソクには、神の光を担保にする、特異な役割がさずけられる。

そのことは、どうもヨーロッパ人だけの感受性にとつたえるだけではないらしい。たとえば、明治時代の落語である「死神」にもあらわれるから。三遊亭円朝の創作落語であるが、周知のとおりロウソクが重要な役回りを演ずる。死神によって冥土につれこまれたにせ医者男は、そこに無数のロウソクが燃えつつけるのを目撃する。威勢よく光線をはなつロウソク、あるいはいまにも燃えつきそうにかほそいロウソク、どれもが現世にいきる人物の反映なのだという。ややあつて、もっとも衰弱した一本にいきあひ、「これはだれの命なのか」と質問する。こたえは、「おまえのロウソクだ」と。ひとの人生を、ロウソクの火焰にたとえたその絶妙な比喩。しごく納得させられないだろうか。もっとも、円朝落語のネタは、もともと中世イタリアに求



められるとの研究がある。とすれば、キリスト教会での奉獻のロウソクとは、源をひとつにするということになるだろう。

ことによると、ロウソクにくらべてランプには、もっとメカニックなドライさが優越しているかもしれない。ランプの灯心はロウソクとあまりちがいはないとしても、液体の油で代替されているため、灯火としてはより実用的であった。すでにローマ時代には、効率よいランプが日常的に使用されていたともいう。ちよつとしたメカニズムの工夫によって、空気の動きによる不安定を回避し、炎の光源を有効に利用することが可能となつたはずだ。そんなことで、初期キリスト教世界から、ランプは礼拝の集會において、重要な役割をはたしてきた。ここでも、神は光であった。ただし、もしロウソクにたいして後塵を拝するとしたら、あまりにメカニックなために、神の配慮の隨意さをよく反映できなかったからかもしれない。あるいは、ランプの効率をじゅうぶんに維持するには、いつも細心の手入れが必要であつたからだろうか。

## ロウソク画、徴しの火

いずれにしても、中世もおわりに近づいてみると、すでに日常にあってはランプが優越していたようにみえる。それなのに、ロウソク存在は否定されないし、むしろ家庭にあってははるかに重用されてもいる。その証拠を、ひとつだけかかげておこう。

一七世紀のフランスに、ジョルジュ・ド・ラ・トゥールという画家がいた。いちおうは名の知れた画家であったにしても、けっしてルイ王朝の豪華と栄光とを祝賀するような、栄達をはたす画家ではなかった。きらびやかな神話画や宗教画が栄華をきわめていたころ、それとは一風かわった画法をこころとしたために、けっして当代第一と評価されることもなかった。「夜の画家」とも称されるように、いくらか暗い画面表現が、明証をもとめる宮廷絵画に背馳したこともある。けれども、死後もかなりののちになって、ラ・トゥールは近代人の感傷につよい訴求力を発揮するようになる。いくつかの理由があるにしても、とりわけ、かれの「ロウソク画」が、注目をあびたからである。

もっともよく知られる一枚を、例としてかかげておこう。「大工の聖ヨゼフ」と題され、現在ではルーヴル美術館の至宝とされる。左に立つ男はヨゼフ。つまり、右の少年イエスの父親と見てよいだろうか。心のたどしいヨゼフは、神の子でもあるイエスを、いつくしみながら育てる。大工を生業とするかれは、練達の技で木工に精出す。そのかいがいしい働きぶりに、好感をもよおされる。たぶん、貧しい家庭なのだろう。だが、少年は愛情にみちた眼差しで、父親の仕事場にロウソクをもちこみ、「お父さん、こんなに暗いなかで、たいへんだね」といわんばかりに、その灯火をさします。ロウソクの炎が、異様にながくのび、それだけに質素な室内をあかるく照らします。この情愛にみちた空間は、どここの家庭にあつてみても、すこしも不自然ではない。少年がヨゼフにむける感謝の感情まで、観るものにつたわってくるように思える。



ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの絵画  
©photoRMN/Gerard Blot/distributed by Sekai Bunka Photo

ロウソク画の妙といつてよからう。「く」一瞬をとらえているとはいえず、ロウソクの炎がつくりだす、揺らぎにみちた空間が支配している。ロウソクは、いつも不安にみちて明色を提供する。その光源によって、ヨゼフもイエスも喜悅にみちた顔が照らされた。慈愛と清純、ふたつの美徳がロウソクの火のもとで対面する。こんな幸福な情景があつたのだ。周囲は、夜間の闇にかくれている。光と闇の対比を、ありきたりではない手法で、ラ・トゥールは表出した。一七世紀にあつて、けっして唯一とはいえないものの、もっとも印象ぶかい技法で実現してみせた。ヨロバにあつて、これだけロウソクの炎の視覚上の効果を発揮できた類例はとほしい。ここでは、ロウソクは、たんに照明のための道具ではない。少年イエスと父ヨゼフとの慈愛と清純をシンボルとして表現する徴である。火は徴しによって、みるものに感動をあたえる。

## 恵みの火の効用

さて、ロウソクやランプの火によってもたらされる光は、わたしたちにとつて、たしかに生活の利便を保障する貴重な資源である。とすれば、その実質の資源性よりも、火のシンボル性のほうに、関心をむけすぎたかもしれない。ここでいうシンボル性とは、火がもつ暗黙の意味をあらわす徴し。だが、人生や集団の真義を告知させるために、人間のがわがさだめた気儘な記号にすぎないかもしれない。

停電世代であれば、むしろ、火が提供する絶大な効用のほうに、よりおおきな強調をよせるべきだったかもしれない。実際、火のない暮らしを考えてみれば、想像もこえた不便なことがありありと、偲ばれるからである。電灯だけではない。火鉢やストーブのほのかな火をたよりに、酷暑の冬をほそぼそと生きぬいてきたものにとつては、ちいさな炭火のありがたさは、いまもって胸をしめつける。そのころ、薪であれ、木炭・石炭であれ、燃料はかぎられており、炎をあげて熱をおくりとどける火の効用は、ずしりと心にしみた。火は、ほんとうは徴しにさきんじて、暮らしのなかでの恵みにほかならない。

火の恵みを人類が発見し、手中におさめたのは、もう数十万年前の原人時代だったと推定される。北京原人は、火の使用を開始していたという。たぶん、自然発火をとらえて、その火を馴致し、熱としての利用をおもいだしたのであろう。それは、暖房のためとも、



照明のためとも、またごく初歩的ではあれ、食料の調理のためにあてたとも考えられる。ホモ・サピエンスのぞくすべての類人猿にあつて、どれも火の使用にいたらなかったところをみれば、人類文明にあつて、火の取得がもつ意義は、はかりしれず巨大だったといえよう。いくどももの試行錯誤の結果として、人間は火を暮らしの改善のために有効に利用することをおぼえた。それは、「エデンの園」でエヴァ(イブ)が林檎の実をかじった、あの初源の体験になぞらえられるほどに、決定的であった。いったん火をおぼえた人間は、もうそれが欠如した生活に回歸することができなかつたはずだ。火山の噴火や、風による樹木の枝の自然発火による火災を目撃していたとしても、これが人間の暮らしのなかに収容できるとは、ひとは、火の恵みによる快適さの獲得に自信をもちはじめた。ここに、本来の意味での人類史が開始される。ちよつと、エデンの園をおわれたアダムとイブとが、神の懲罰のもとに、しかし独自の歴史を創始することになったように。

古代ギリシアの神話伝承者たちは、火の

獲得という大事件を、ひとりの巨人の技にみたてた。プロメテウスである。神話によれば、天地を支配するゼウスは、火を独占して人間たちから秘匿し、神とひととの境界を厳密にひいた。人間は、ひたすら不便を忍ぶほかなかった。この惨状に激怒したティタン族のロメテウスは、憂慮のあまりその身分もかえりみず、主神ゼウスの目を盗んで火を松明にうつしとり、人間世界にゆずりわたす。けれども、神々の掟に背反したプロメテウスは、ほかに企てた罪状をとがめられて、ついに捕縛の身となり、コーカサスの高山に磔の刑罰に

処されることになる。猛禽に内臓をついばまれ、その苦難はいつはてることもない。のちに、人間の英雄ヘラクレスによって解放されるまで、プロメテウスは贖罪をつづける。

ギリシア悲劇で、その悲惨と栄光とをうたわれたプロメテウスは、まさしく人間世界にとって「文化英雄」であった。盗みだした火によって、確実に生活の利便は保障されたのだから。実際には、古代ギリシアにあつては、その始原から火の使用はじゅうぶんに普及していた。ただし、照明や暖房・調理、それに工業などの産業における燃料の調達には、かなりの困難がひかえていた。ギリシアにかぎらないことだが、燃料のほとんどは薪、もしくは炭であつた。資源はかぎられていた。ここに、地中海のような乾燥地帯にあつては、いすれ深刻な資源枯渇になやまされるだろう。

照明用の油脂が、いちはやく開発された。熱源としてならば、動物の糞を乾燥させて燃やすこともできる。とはいえ、慢性的な燃料不足は解消されず、また屋内での火の使用には、いつも危険と不快とがともなうていた。たくみに排煙できぬかぎり、密閉された室内はくすぶっていたらうし、ときには不注意から火災を発生させることもなつた。それでも、生活現場に接して火が利用できる利便は無上のものがあつた。竈は、家庭生活の核心として維持され、改良されていった。

かつてのヨーロッパ世界にあつて、竈は家族の存在の証明であつた。つまり、竈ひとつに、ひとつの家族があつたのである。中世における人口調査は、じつの意味での人口ではなく、竈の数を登録・計量するものであつた。現今の観念では、「世帯」に相当する。竈では、パンが焼かれ



たし、粗末な鍋のなかで、豆のスープがわきたつた。家族とは、竈ひとつによって養うことができる親族集団のことである。ときには、竈を単位として税額がきめられたといひやたらとその数をふやすべきものではなかつた。

わたしたち日本人は、いまだにあの囲炉裏風景を懐かしんでいる。囲炉裏は竈とはかなりことなつて、かならずしも調理用だけではない。照明と暖房の光熱、それに茅葺き屋根の保存のための煙源であつた。いまだきの居酒屋さんのように、けんちん汁や岩魚の塩焼きを仕上げる利器ではなかつた。いわば、副次的な火としては有用であつただろうが、主役は竈だったのである。

もつとも、火の産業上の効能を忘れてはなるまい。ながらく世界各地において、農業は焼き畑によつていとなまれてきたのだから。大河における灌漑と排水が可能だつた地域をべつにすれば、大小の規模の焼き畑こそ、農作の基本であつた。畑という文字が、火と田によつて合成されるように、火による開墾と、その循環が生産性を保障した。地味の保全是、休耕と焼却の交替により可能になつたのである。かなり粗放な農業であるかにみえて、じつは焼き畑農業は、火の恵みを完璧なまでに受容する体系であつた。

## 怖れの火、浄めの火

プロメテウスが獲得した恵みの火は、しかしいつも、人類に幸福をもたらすとはかぎらない。早い話が、プロ

メテウスが盗みだした火は、たぶんゼウスという主神に  
 関連する雷に発するものであった。雷は、天空の神の  
 怒りの表現であり、その音響と閃光によって、ひとには  
 かりがたい恐怖をもたらした。火は、まずもって怖れの  
 対象だったはずだ。雷の火とちがって、制御が困難な、  
 暴走する火であり、いついかなるときにも、人間に損害  
 をあたえうる。たしかに、巨大な樹木も、一瞬の落雷に  
 よってまじぶたつに割かれ、黒こげになる。その火が、怖  
 くないはずがない。

まして、火山の脅威には、ひとはただひた  
 すらにひれ伏して、逃避をはかるばかりであ  
 る。世界のすべての場所で、火山の光景に接  
 するわけではないにしても、いったん噴火の  
 現場におかれてみれば、天空にたかく噴射  
 される火炎や雷鳴に、はかりしれぬ自然の  
 破壊力を実感せざるをえなかつたはずだ。

むろん、ふつうの人間体験からすれば、も  
 とと平常の事件、つまり火災のほうに、より  
 危険を察知しただろう。ごく粗末な掘っ立  
 て小屋が火につつまれる情景にはじまり、都  
 市の街区全体が焼失するような大火災にい  
 たるまで、規模の大小はあるにしても、火災  
 が日常生活におよぼす恐怖感は、なみたいていではな  
 かつたようだ。日本についていえば、兵火にかかった京都  
 の下町や、江戸のいくどもの大火にのみこまれた新興  
 首都にあつても、火災の強烈さは住民を恐怖におとし  
 入れた。幾晩も燃えつづけ、財産と生命とをうばいさ  
 る火災は、そのもとの原因が人為的であるほどに、結  
 果としての損壊への悔悟をうながした。愚かにもよび  
 こんでしまった悲慘が、火災の恐怖を増幅したのだら  
 う。



そのためか、洋の東西を問わず、来世のなかでも地  
 獄にあつては、火は特別な責め苦として登場する。地  
 獄におちた人間は、繰りかえし火炎によって焼かれ、な  
 おもその灼熱をのがれることができない。恵みであつた  
 はずの火は、ここでは劫火として、ひとを苛めつつける。  
 噴火や落雷、それに火災の情景をみたひとびとは、地  
 獄の苦難の現実を表現するために、あえて火による懲  
 罰をえらんだのだうた。

ただし、火のがわに立っていえば、地獄における暴圧  
 だけに注意を集中するのも、不公平とい  
 うべきかもしれない。地獄の火は、現世におけ  
 る罪業を焼却するための手段でもあつた。  
 浄めの火。つまり、火は悪行の始末を達成  
 するための、最終的な拠りどころである。  
 汚れを抹消する方法には、いくつもありう  
 るにしても、もつとも容易で完璧なもの  
 といえ、火によって燃やしつくすことだ。  
 ここでの火の役割は、ひたすら神聖な滅却  
 力である。火にかかれば、不用意に生じた  
 汚辱は、たちどころに消滅する。

聖火という発想は、おそらくここに起源  
 するのだらう。火そのものが神聖でないに  
 しても、火の作用によつてもたらされる清浄は、万物に  
 神聖さをさすけることができる。オリンピックの聖火  
 は、じつはさして古来の伝統ではないそうだが、たしか  
 に古代の神話や信仰のうちには、火による浄化という  
 普遍の了解があつたようだ。たとえば、ヒンドゥー教寺  
 院の祭壇で、はげしく燃えあがる炎と、これに対抗す  
 るかのような冷水とが、たがいに自然界の支配をめぐ  
 って競いあうとき、火と水との浄化力の現実が、きわめ  
 て説得的な図柄で表現されるように思われる。

## 火の再発見へ

さて、こうして火をめぐるわたしたちの想念と生活とは、四つことなつた領界を随意にはしりめぐることになる。徴しの火、恵みの火、怖れの火、そして浄めの火である。これほどに多義性をおびた火。むろん、自然界に遍満する諸要素のうちでは、水も土も空気も金属も、それなりの多義性を主張できるだろう。けれども、火ほどにその形質と機能とを対照させつつ併有することはない。徴しと恵みと怖れと浄めとが、あまりに強烈なコントラストを演ずるからである。暮らしから宇宙まで、火が演ずるドラマは、想像をはるかにこえて豊かで複雑である。

さて、ひるがえって現在の事情を推察してみよう。さいわいにも、わたしたちはもう、火山や落雷がうみおとした炎をおつて、プロメテウスよろしく火を盗みだすといった冒険をこころみる必要はない。不幸な火災による犠牲は、なくはないが、防災の方法は熟知している。聖なる火への想念は、たとえばオリンピックの聖火リレーによってみだされる。そしてなにより、停電の不便から解放された。火はごく日常の現象になつたのである。

けれども、その結果として、わたしたちはかえって火の現実態から隔離されてしまったのではないだろうか。暮らしの周辺をみよう。都市ガスをやプロパン・ガスをのぞいて、火炎を目撃することはなくなつた。「マッチ一本、火事のもと」と夜回りの声がきこえるのだが、じつはおおくの家庭には、マッチの姿がみえない。ガスの点火だつ

て自動化された。ロウソクは、もう防災用としても地位があやうく、かろつじて小じやれた洋風レストランのテーブルのうえで、妖しく燃えているばかりだ。都市生活は、あまりに光にみちあふれているが、だからといってその光源に火を発見することはまれである。どれも、冷たく機械的な発光に依存している。

停電時代の繰り言にきこえるだろうが、あらためて現代に火の現実をとりもどしたいと熱望している。むろん、ランプ暮らしにもどろつとか、火打ち石の技術を再現しようとか、江戸の火事現場を再訪しようとか、あるいは地獄の劫火をあびて神聖さの追体験をこころみようとか、そんな非現実をとなえているわけではない。せめて、いま一瞬、すべての電灯と暖房器具とガスコンロをオフにして、火の精髓に近づいてみよう。ロウソクなら最上だ。あのラ・トゥールのロウソク画のように、炎が照らした家族や友人の顔のほてりと、壁につる人体の影の濃厚さを、あらためて認識する瞬間を共有してみたい。この人為的な時間のなかで、わたしたちは火の意味を再発見することになると信ずるのだが。

榊山 紘一（かばやまこういち）

歴史学者、評論家、国立西洋美術館長、東京大学名誉教授。専攻は西洋中世史。一九四一年東京生まれ。東京大学文学部西洋史学科卒。同大学院修士課程修了。京都大学人文科学研究所助手、東京大学文学部助教授、教授などを経て現職。ヨーロッパ文化史を踏まえて思想・文化全般に評論活動を行う。著書は、『ゴシック世界の思想像』（岩波書店）、『火の百科事典』（共編著・丸善）など。